

# 連載 104 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長  
橋本 満義 (66歳・内科)

今日も、白い柴犬のお出迎え。  
在宅業務は、  
患者さんの玄関先から始まっている。  
飼い猫は、流し目でこちらを見つめている。

在宅業務は、仕事の足場をかためてから始まります。そして、生きた仕事というものは、常に私たちを育み成長させてくれます。



今日も、S.Mさん(90歳、女性)のお宅を訪問しました。すると、いつものように白いワンちゃん(柴犬)が、ワンワンワンとしっぽを振りながら嬉しそうに、私たちを出迎えてくれます。流し目の猫ちゃんは、お散歩の最中なのか影も形もありません。

S.Mさんは、高齢と転倒打撲症の繰り返しで脊柱管狭窄症となり、脳梗塞、糖尿病などの合併症もあり、寝たきりの傾向にあります。さらに少々、構音障害もみられます。ですが、ご本人は、介護医療サービスを受けながらの在宅療養を希望されています。自由気ままな人生で、人からの束縛をあまり好まないため、S.Mさんをお世話するには、とても手間

がかかります。また、後見人の娘(長女)さんは県外在住でもあり、今後、要介護レベルが悪化した場合、大変な問題になることは周知の事実なのです。

私たちにとって最も大切なのは、患者さんの症状に対して、いつでも対応できるように準備していくことです。たとえば、国(厚生労働省)が推奨している、在宅と入院を連携させた地域包括ケア病棟を持ついくつかの病院と、私たち関連医療機関とがタイアップして、あらゆるニーズの先取りをすることなどで、中でも、いつも問題となりネックとなるのは、まるで同居人のような生き物や動物などへの対応です。おのずと、ケースバイケース

にみんなで知恵を出し合うことが必要となってきます。

あくまで、患者さんのデマンド(要求)を満たし、クオリティ・オブ・ライフを充実させるために…。

現在は、時代のスピードがあまりにも速く、ややもするとあらゆるものをのみ込んでしまう様相を呈しています。

次々とせまりくる「高齢者在宅医療問題」の解決は困難です。しかも加速的に発現し、すべてにおいて多種多様です。

私たちは、それらの要望を十分に満たすため、急ぎ、知恵を出し合い行動すべき時なのかもしれません。

## 外来診療(かかりつけ医) 要予約 総合内科・漢方診療科

お医者さんが 24時間・365日体制で対応  
来てくれる (松山市全域)

私たちは、質の高い  
在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 22名  
(常勤8名、非常勤14名)  
内科・外科専門医 18名  
(国立がんセンター勤務歴有3名)  
精神科専門医 2名  
麻酔科専門医 2名  
(ペインクリニック科)  
末期がん治療(緩和ケア)  
相談室開設!

Hyper Blood Viscosity (高血液粘度群)を科学する 臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設  
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所  
(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788  
<http://www.touzaikai.jp/>